

# オランダ人がやってきた!

中国の学問、儒学(漢学)を学ぶ人が多かった江戸時代だったが、中ころから、中国以外に貿易していたもう1つの国オランダを通じて、西洋の医学や学問への関心も強くなっていった。8代将軍吉宗が蘭学に興味を示し、蘭学がさかんになっていった。

## <医学や科学を発達させた蘭学>

江戸時代に新しく入ってきた西洋の学問を、蘭学(蘭はオランダのこと)という。当時は西洋の学問は、幕府が貿易を許していたオランダを通じて日本に入ってきたため、蘭学といわれたのだ。蘭学が入ってきたことによって、医学や天文学などの科学や、洋風画などの西洋の文化が発達した。

### 西洋と江戸をつなぐ「長崎屋」

オランダは、長崎に貿易会社の日本支店「オランダ商館」を置いた。オランダ人のキャピタン(商館長)は、将軍に会うために、毎年春に日本橋の本石町にあった「長崎屋」にとまった。蘭学者たちは、長崎屋でキャピタンや通詞(通訳)から話を聞くの楽しみにしていた。

### オランダ人を見物にきた人々

キャピタンや日本人の通詞には、幕府から許可をもらった人(医者や役人など)しか会えなかったため、江戸っ子たちはオランダ人をひと目見ようと、興味しんしんで長崎屋の周りに集まった。



### 蘭学者たちが集まった私塾「芝蘭堂」

蘭学者の大槻玄沢は、1786(天明6)年、本材木町(現・京橋)に「芝蘭堂」という私塾をつくり、多くの蘭学者を招いて勉強会を開いていた。芝蘭堂には、全国から蘭学を学びたい人が集まり、生徒の数は約100人。芝蘭堂は日本の蘭学の中心地だった。

みんな楽しそうだね。



特別ゲストの大黒屋光太夫は、乗っていた船が難破してロシアに流れ着いたんだって。そこで女王様会ったらしいよ。



通常、当時の食事は1人膳だったが、西洋風に大きなテーブルを使っている。

特別ゲストの大黒屋光太夫。

扇子にロシア語を書いている。

洋服を着た森島中良。

ふだん着(和服)の森島中良。

ナイフ

フォーク

スプーン

ワイングラス

### 西洋の正月を祝う芝蘭堂での「オランダ正月」

1794(寛政6)年間11月11日(太陽暦では1795年1月1日)に江戸にいる蘭学者が集まり、新年会と名づけて太陽暦の1月1日を祝ったことを記念してえがかれた。会合は44回続いた。

大槻玄沢は、前野良沢、洋風画家の司馬江漢、[解体新書]を訳した1人の桂川甫周(4代)と、弟で戯作者の森島中良(洋装と和装でえがかれている)などを招いた。テーブルには西洋のものがいろいろとえがかれている。

### 日本語に訳された『解体新書』

蘭学医だった前野良沢と杉田玄白は、人体解剖を見にいき、持っていたオランダの医学書の正確さにおどろいた。そこから2人を中心に、医学書『ターヘル・アナトミア』を日本語に訳す作業がはじまった。築地鉄砲洲(現・明石町)の中津藩中屋敷で作業は進められ、ついに『解体新書』ができた。



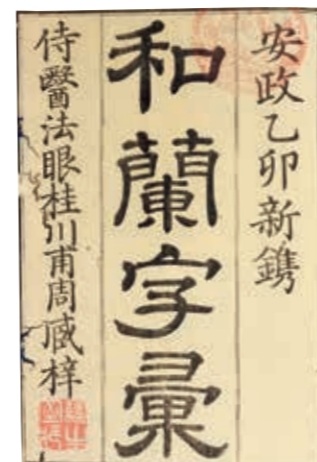
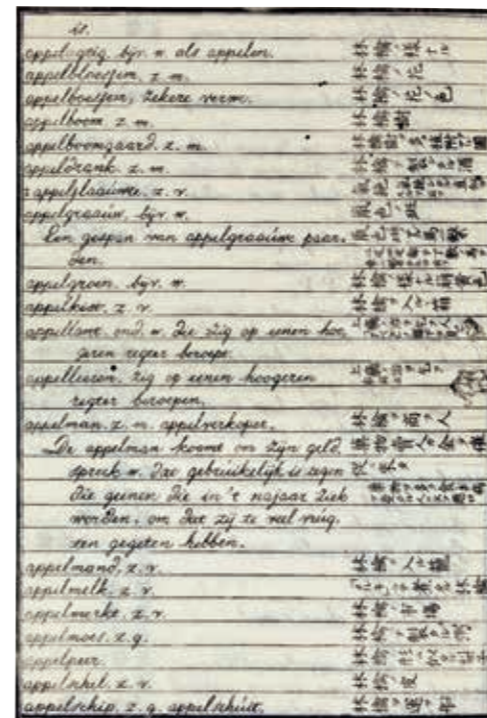
杉田玄白  
江戸生まれの蘭学医。『解体新書』を訳すときの苦勞を書いた『蘭学事始』の著者。

いろいろな本を参考にしていたのね。



### オランダ語の辞書もつくった

『解体新書』のほん訳が進められていたころ、オランダ語の辞書はなく、オランダ語の知識のある人もほとんどいなかった。『解体新書』をつくった人たちは、いろいろな本から日本語の訳語を推測して、オランダ語の辞書までつくった。



当時最大の蘭和辞典『和蘭字彙』[解体新書]を訳した1人、桂川甫周(4代、1751~1809)の子孫に当たる桂川甫周(7代、1826~1881)がつくった全10冊の辞書。築地には、桂川家の屋敷跡の案内板がある。



『解体新書』の表紙  
『解体新書』は、もとにした『ターヘル・アナトミア』を正確に訳したものではなかった。オランダ語に訳されていたドイツの医学書なども、参考にされていた。

画像は非公開です。



『ワルエルダ解剖書』のとびら絵  
『解体新書』の解剖図をえがいたのは、秋田生まれの小田野直武だった。『解体新書』の表紙は『ワルエルダ解剖書』をもとにしている。



### 『ターヘル・アナトミア』のなかの人体図

最初に日本語に訳す作業がはじめられた図。体の表面なら名前と場所がわかるので、そのオランダ語を日本語に置きかえていくことで、オランダ語の単語がわかると考えたのだ。

日本語の訳語は、何冊も本を読んで推測したんだって。



### オランダ語も英語も勉強した福沢諭吉

中津藩邸でオランダ語を勉強していた諭吉は、ある日横浜に出かけ、外国人に話しかけて自分のオランダ語を試したところ、まったく通じなかった。外国人が話していたのは英語だった。「これからは英語の時代だ」と思った諭吉は、そのときから英語を勉強しはじめた。

### 生まれるのが早すぎた天才 平賀源内

平賀源内(1728~1780)は讃岐国(現・香川県)に生まれた。蘭学者で、画家で、発明家で、小説も書いた。老中・田沼意次(→p.47)に気に入られ、いろいろなものを発明するが、当時の人々には理解されなかった。

エレキテル  
静電気発生装置。ハンドルを回して、内部のガラスびんと金ばくをこすりつけることで、静電気が発生する。



『西洋婦人図』  
日本ではじめて油絵の具を使ってえがかれた洋風画(油絵)とされる。



画像は非公開です。